

現実と虚構の狭間で

——ディケンズとセポイ反乱——

The Riot in Fact and Fiction: Dickens and the Indian Mutiny

加 藤 匠

KATOH Takumi

序 論

1857年10月4日、ディケンズは旧知のアンジェラ・バーデット＝クーツ (Angela Burdett-Coutts) に以下のような手紙を送った。

連日『タイムズ』紙 (*The Times*) に寄せられた手紙を読んでいると、……自分がインドの総司令官であったなら、という気がしてくる。私なら、まず東洋人どもを (彼らがストランドやロンドン、キャムデン・タウンに住んでいる人々とは少しの共通項も持たないかのように) 震えあがらせてから、彼らの言語を使って、自分が神によって任命され、先の残虐行為で汚れた民族を全力で殲滅するという、私がかの地に来たのは他ならぬその目的のためであり、せめてもの慈悲として、あらゆる適切な処置が素早く実行に移されており、彼らを地上から完全に抹殺する作業が進行中であることを宣告するのが¹⁾。

東洋人に対する激しい人種的偏見を含んだ手紙であるが、このような反応を引き起こすこととなったのが、当時大きな話題となっていたセポイ反乱であった。この反乱でセポイが犯したとされる残虐行為が新聞の記事や社説、雑誌といったメディアを通して報じられ、国会で論戦が展開されるまでになっていたのだが²⁾、それに対してディケンズはこのような形で反応していたのである。

その最大の要因が、兵士や現地の人々の目撃談から構成された手紙を中心とする、誇張気味の報道であり、その格好の対象となったのが、1857年7月に発生したカウンポールでの虐殺事件であった³⁾。事件はナーナー・サーヒブ (Nana Sahib) に率いられた反乱軍がカウンポールに到達した際に起こったもので、アラハバードまで船で安全に送り届けるという彼の約束を信じ

た当地のイギリス人が船に乗った途端、彼らを案内するはずのセポイが銃や剣を取り出して虐殺が始まったうえ、無事逃れた女性や子どもは捕らえられた後に殺害され、遺体は井戸に投げ捨てられたというものであった。この虐殺そのものがセポイ反乱における最悪の虐殺のひとつだったということもあるのだが、その主な対象となったのが女性と子どもだったということもあり、イギリスでは激しい怒りの声があがったのである。同年9月5日付の『イグザミナー』誌 (*The Examiner*) に掲載された、「士官や兵士たちの妻や子ども240人ほどが、カუნポールの路上でオークションにかけられ、その後虐殺された」という報道や⁴⁾、『ブラックウッズ・マガジン』誌 (*The Blackwood's Magazine*) における「女性たちは、夫、両親や子どもたちの前で暴行された後で、めった切りにされて殺された。子どもたちは宙に放り投げられ、落ちてくるところを銃剣の先で突かれた」といった報道⁵⁾などはその典型であるが、『タイムズ』紙でも同様の報道がなされている。

彼らが見つけたのは、血まみれの床の上にはばらまかれていた哀れな犠牲者の服だけであった。……歩道には二インチほどの深さの血が溜まっており、当地に住む人々からの報告によれば、われわれが前の晩に敵を倒した後でセポイとインド人騎兵が当地にやってきて女性を皆殺しにし、女性の遺体とともに子どもたちを生きのまま敷地内の井戸に放り投げたようだ。私自身も実際に見たが、恐ろしい光景であった。われわれが見た遺体から察するに、女性たちは殺される前に服を脱がされたい。……世界の歴史上、このおぞましい大虐殺に匹敵するものなどあるまい⁶⁾。

この種の報道は「家庭の天使」に代表される、ヴィクトリア朝の女性イメージに対する最大限の侮辱行為であり、「カუნポールの井戸」は対インド強硬派のスローガンとして機能することになる⁷⁾。女性や子どもが殺されるさまが描かれた図 (図1-2) に見られるように、このイメージは図版という媒体を通じても普及することとなった。

『ハウスホールド・ワーズ』誌 (*Household Words*) の編集を手掛けていたディケンズがそのような動きに反応することとなったのは、先の引用からして自明のことであろう。実際に1857年から翌年にかけての同誌にはセポイ反乱に関する記事が多く掲載されているのだが⁸⁾、その最たるものが同年のクリスマス増刊号に掲載され、ディケンズが「品のない、きわもの的な関係を持たせたり、そのままの形で作品に反映してしまうことがないよう細心の注意を払ったうえで、インドで見られたイギリス人のもっとも良い部分を記念するために作品を構想した」(*Letters*; VIII, 482-3)、ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins) との共作「あるイギリス人捕虜の冒険」("The Perils of Certain English Prisoners") であった。

主にイギリス、それもロンドンを主な舞台として作品を書いてきたディケンズが大英帝国内

の反乱を題材として書いた「あるイギリス人捕虜の冒険」を、当時の報道という歴史的コンテクストに位置づけるとき——換言するならば、報道で流された「真実」とフィクションとが絡みあうさまを直接見るときに、何が見えてくるのだろうか。

I：理想の女性像とは

セポイ反乱、特にナーナー・サーヒブの残虐性と対照的に扱われたのが、インド在住のイギリス人女性が見せた勇敢な振舞いであった。すなわち、不実で、狡猾で、血に飢えた反乱者と、イギリス人の女性の純粹さと勇気が二項対立を形成する形で報道が展開されたのである。イギリス人の女性に対して、反乱で体験した数々の苦難に対する同情心が寄せられたことは改めて言うまでもないだろうが、本国の人々に特に称賛され、広く報じられたのは、敵に囲まれながらも男性に勝るとも劣らない勇気を示したことであった。『タイムズ』紙から例を挙げておこう。

報告によれば、ナーナー [ママ] が不純な動機から生かしておいた哀れな女性たちに……脅しや希望を抱かせるようなやり方を通じてナーナーの意向が伝えられると、……彼女たちは激怒し、もし強引に意に従わせようとするのなら、死を選ぶか自分の歯を使って互いを殺しあうという決意を表明したという⁹⁾。

時には、女性の口を通して大衆の思いが代弁されることもある。

ある將軍の娘だという若い娘が……ナーナーに「あなたほどの弾圧をやった王はいませんし、女性と子どもを殺せと説く宗教もありません。あなたに何があったのかは知りません。この虐殺でイギリス人の数が減ったなどと思わないで。誰か残っている限り、あなたから目を放すことはありませんから」と話しかけた。しかし、ナーナーはまったく関心を払うことも慈悲を示すこともないまま、彼女の手には火薬を持たせて爆死させるように命じたのである……¹⁰⁾

特に繰り返し報道されたのは、ウィーラー將軍の十八歳の娘マーガレット (Margaret Wheeler) をめぐりものであった。反乱直後に反乱者アリ・カーン (Ali Khan) の家へ連れ去られた彼女が、家族が寝静まるのを待って一家を皆殺しにし、その後みずから井戸に飛び込んで自殺したというのがその報道の趣旨なのだが、『タイムズ』紙をはじめとするメディアは、手放しで彼女の行為を称賛することとなった (図3)¹¹⁾。世間の人々は女性の苦難に対して同情を示すだ

けでなく、怯むことなく敵に向かっていく姿を称賛したのである。

このような報道に対し、「インドに直接触れたくはないが、わが女性たちがインドで見せた勇敢な行為ははっきりと書いておきたい」(Letters; VIII, 469) といった形で反応したディケンズは、「あるイギリス人捕虜の冒険」に女性の英雄的な行為を露骨なまでに書き込んでくる。主人公ギル・デイヴィス (Gill Davis) を危機に立ち向かわせるきっかけとなり、自身でも危機に対処しうるだけの勇気を示すメアリオン・マリオン (Marion Maryon) だけでなく、夫とともに周囲の邪魔にしなければならないポーデイズ夫人 (Mrs. Pordage) を除く女性は、危機に対処する勇敢な女性として表象されることになる。

俺が人形かかわいい女の子ぐらいにしか思っていなかった、小柄なフィッシャー夫人は、その戦いに積極的に参加しただけでなく、予備の武器に進んで弾を装填してくれた。……「父は軍人で兄が船乗りなのだから、私にも分かるわ」マリオンはそう言うと、俺と一緒にやり始めた。……美しくて華奢な、この二人の女性が、銃を扱い、火打石を打ち、点火装置に注意し、他の人たちが手渡しで火薬や弾をリレーしていくのを穏やかに指示しているさまは、信頼の置ける最高の兵士が怯むことなく活動しているかのようであった¹²⁾。

私が銀色に輝く家に目をやると、そこに見えたのは、ヴェニング夫人の灰色の髪と黒い瞳——塹壕の階段の一番上でまっすぐに立っている姿——であり、彼女が孫を自分のドレスの後ろにあるひだの部分に隠し、片方の手で海賊を殴ったものの、ピストルで撃たれて倒れる姿であった (191)。

他にも、戦いを前にしたマリオンがデイヴィスに「もし私を海賊から救うことができないのなら、私を殺すことが私を救うことになるのよ。そうすると約束してちょうだい」(185) と誓わせる場面があるのだが、本来男性によって守られるべき対象であるはずの女性ですら、ここではただ受動的に守られるだけの存在ではない。

ここで描かれた女性像はディケンズだけのものではなく、他の作品においても同様の表象を認めることができる¹³⁾。反乱の翌年にニューヨークで初演され、後にイギリスでも上演された、ディオーン・ブーシコー (Dion Boucicault) の『ジェシー・ブラウン、またはラクナウの解放』(Jessie Brown; or, The Relief of Lucknow) では、エイミー・キャンベル (Amy Campbell) が、途方に暮れる兵士ランダル・マッグレガー (Randal MacGregor) を鼓舞する。

キャンベル夫人：ああ、カウポールを思い出してちょうだい！ 子どもたちは母親の前でめった切りにされ——そして、私たち女性は死よりも恐ろしいことのために救われた

拳句、切り刻まれ、拷問され、冷酷に殺されたのよ。ランダル、あなたはこれを見ようというの——こんな運命から、私たちを守ってくれる？

ランダル：エイミー、僕の胸は張り裂けそうだ。どうしたらいい？

キャンベル夫人：私たちが殺してちょうだい！ 倒れてしまう前に、慈悲をかけて殺してちょうだい……¹⁴⁾

ここで念頭に置かなければならないのは、この作品が芝居であるということであり、役者の話す言葉だけが作者の意図を伝達する手段ではないということである。この作品においては、ヴィクトリア朝演劇で頻繁に用いられた活人画の手法が五度にわたって用いられており、主人公であるジェシー・ブラウンがナーナーを刺す場面、女性たちが自ら引き裂いた衣服を包帯として看病する場面を通じて勇敢な女性像が、戦いで傷ついたジョーディ・マッグレガー (Geordie MacGregor) の姿を通じて勇敢な兵士像が強調されることとなる。

ここで描かれた女性像には、報道で称賛された女性像——〈男をその優れた人格を通じて、駆り立てるマドンナの女性像〉、〈危機に対処しうるだけの行動力を備えた女性像〉——が対応する。「あるイギリス人捕虜の冒険」の副題である「女性や子ども、銀、宝石という名の財産」(“Their Treasure in Women, Children, Silver, and Jewels”) は、作品における女性の意義の大きさを表わしたものであるが、この「財産」は、作品で描かれた理想的な女性像を意味するものと解釈できるはずである。

Ⅱ：「カウンプールを忘れるな！」¹⁵⁾

女性に対する残虐行為に復讐を叫ぶ当時の世論については、『イグザミナー』誌の「イギリス人の妻や子どもが流した血が、慈愛や名誉といったあらゆる感情を踏みにじった残忍な敵に対する復讐を訴えている」¹⁶⁾、『ブラックウッズ・マガジン』誌の「今イギリスがインドと世界に対して行なわなくてはならないのは、正当で偉大な行為である……死こそ、イギリス人の血が手に染み込み、イギリス人の純潔を犯したあらゆるインド人どもに対する妥当な刑罰である」¹⁷⁾といった報道からも窺えるだろう。『タイムズ』紙にも同趣旨の指摘がある。

いかに挑発されようとも、女性や子どもに対して戦争などはないのだが、あのセポイの反乱者に対してはごく小さな憐れみすら感じる必要はない。……冷静な方針で臨むにしても、恐怖を感じさせる——英国領インド各地の村で何世代にわたって語り継がれるような——実例が必要なのだ。もし今回徹底的に行なうことができないにしても、われわ

れよりも分別を持つ人々にも、東洋人が尊重するものはただ抵抗できないほどの力だけなのだとして了解させるまで、何度も繰り返し行なわなくてはならない。……この反乱を鎮圧することで、それがどんなに恐ろしいものであれ、ふさわしいだけの刑罰を血に飢えた反乱者どもに与える任務を負った兵士をイギリスが援助するということを奴らに知らしめてやろう¹⁸⁾。

ここに挙げたメディアとともに、復讐を叫ぶ世論の喚起に一役買ったのが『パンチ』誌 (*Punch*) である。ジョン・テニエル (Sir John Tenniel) が描いた「正義」(図4) に象徴されるように、同誌でもっとも前景化されることになるのが、セポイに対する復讐心であった。1857年9月12日号における“LIBERAVIMUS ANIMAM”では女性と子どもの苦しみが強調されるだけでなく、「奴らが殺した女性と赤ん坊を忘れるな」という言葉とともに、正当性を委ねられた復讐者として自らを規定する。

われわれの剣が虐殺にやってくる。それが来るのは／正義の名の下に。やるべきことは必ず果たす／怒りに燃えた世界は、喝采で迎える／太陽の下で行なわれたその大殺戮を。／そして、怯えたインドはずっと語り継ぐだろう／彼らが犯した殺人と欲望に、イギリス人がいかに応えたか／そして、豊かで豪華なデリーをみじめにした／犯罪で、名誉を汚すことはなかったと¹⁹⁾。

この主題は、二回にわたって掲載された「哀れなセポイよ！」(“Pity the Poor Sepoys!”) という詩にも反響している。同年9月5日号の詩では「残酷だが、臆病な若者」としてセポイを表象したうえで、残虐な復讐に異議を唱える人道主義者の主張を揶揄して「ああ！ あの哀れな反乱者にあまり厳しくしちゃだめだ／彼らはわれわれの女性や子どもを苦しめて殺したけれども」、「われわれの兄弟たる黒人を、女性や子どものために絞首刑にしないで／彼らは考える限りの悪をすべてやってのけたけれども」(104) と書き、彼らを嘲笑するとともに、復讐を正当化するのである。10月10日号の詩においても、「もし絞首刑をやるのなら、捕らえたセポイはすべて絞首刑にしてしまえ……首を絞めている間に、犯罪者に対する慈悲や許しなどを語るのはやめよう」(154) と書き、その姿勢を明確にするのである。

復讐を叫ぶ世論に応える形で、ディケンズはスパイ行為を働いてイギリス人の信頼を裏切った現地人、クリスチャン・ジョージ・キング (Christian George King)²⁰⁾ の処刑を作品に書き込むことになる。

「あれは何だ」マリオン船長がボートから大声をあげた。声が反響している以外、まっ

たくの沈黙。

「裏切り者のスパイだな」カートン司令官はそう言い、弾をまた装填するために、私に銃を手渡した。「あの動物は、別名クリスチャン・ジョージ・キングと言うはずだ！」

弾は心臓を貫通した。何人かがその場に走って行って彼を引っ張り出し、湿った泥を顔に塗りつけたが、彼の顔は世界が終わるまで、これ以上何の反応も示すことはないだろう。

「あの木で首を吊ってしまおう」カートン司令官は大声で言った (205)。

信頼に値しない黒人、キングがただ殺されるのではなく、その死体が絞首刑にされるという描写は、〈反乱を鎮圧するためには、反乱を起こした現地の人々を殲滅することが最良の手段である〉と考え、あるスピーチの中で「イギリスの大砲から飛ばされた……惨めなインド人」を切り刻むことすら支持したディケンズの思いを反映したものと解釈しうるだろう²¹⁾。彼がこの場面を作品の核と考えていたことは、この作品で唯一の図がこの場面を描いたものであることから判断しうる (図5)。秩序の破壊に加担した者を絞首刑にすることは支配者としての自らの位置を再確認する行為であり、イギリス側が求めていた復讐にはその意味が込められていたことをディケンズは感じていたはずである。

Ⅲ：反乱はなぜ起こったか

当時の報道においては、統治するイギリス側に問題があり、インド人を統制しきれなかったことがセポイ反乱の要因として報じられていた。ディケンズがこの見解を共有していたことは、『ハウスホールド・ワーズ』誌8月15日号に掲載されたE・タウンゼンド (E. Townsend) による短篇小説「インドにおける反乱」(“A Mutiny in India”) では、時代遅れの教育の産物であり、「字は下手で、スペルも間違いだらけ、字はまったく読めない」デイントリー (Daintry) という役人が登場し、「すぐに裏切るインド人の気質」を知らなかったために命を落とすことになるという表象から垣間見ることができるだろう²²⁾。「インドをさまよって」(“Wanderings in India”) という連載小説がその典型だが、ディケンズは『ハウスホールド・ワーズ』誌上で、司令官の無能とインドの腐敗した法体系を繰り返し批判することになる。

ディケンズがこのとき念頭に置いていた人物は、手紙の中で「かの卑劣なキャニング卿が出した、慈悲を説く感傷的な宣告ほど大きな間違いなど犯されたことがないと思う」(Letters; VIII, 473) と批判していた、1857年に就任したインド総督キャニング卿 (Lord Canning) であつたはずである。キャニングはその後の統治を円滑に進めるために、反乱者の処罰を定めた布告を発表してイギリス側に節度ある対応を求めたのだが、そのような姿勢が復讐を叫ぶ人々の強い不満を招いていたのである。保守的傾向の強い『タイムズ』紙はキャニングを「慈悲深きキ

ヤニング」と揶揄し²³⁾、残虐行為を残虐行為で返そうとする人々に警告を発したベンジャミン・ディズレーリ (Benjamin Disraeli) とともに、激しく非難した²⁴⁾。1857年10月24日号の『パンチ』誌においては、キャニングは女性や子どもに対する残虐行為が近い将来また起きることを望んでいるとされ、「そのようなイギリス人は、戦争が終わり次第すぐにでも絞首刑に処されるべきだ」(170) と批判されることとなった (図6)。『ブラックウッズ・マガジン』誌においても、キャニングへの直接の言及こそないものの、「節度を求める前に、われわれはまず強くあらねばならない。言論の帝国以前に、武力の帝国でなければならない。インド支配の大原則は、力であるべきだ」という形で力の支配が推奨されることとなる²⁵⁾。人々にとって、慈悲を唱えることは殺された女性や子どもに対する背信行為に他ならなかったのである。

「あるイギリス人捕虜の冒険」に登場するポーデイズ行政官 (Commissioner Pordage) は、このようなコンテキストから捉える必要があるはずである。優柔不断で、原則にこだわり、自身が政府を体現するかのように振る舞うこの人物は明らかにキャニングを揶揄したものであり、当時の民衆が求めた理想像である〈確固たる統率力、言葉よりも行動で示す姿勢、そして何よりも、残虐行為の犠牲者に報いるための復讐心〉を体現したマリオンとカートンとの間に、見事な二項対立を形成することになる。

「おい、間違っても必要以上の残虐行為はしないでだろうね。……政府としては、思いやり、敬意、寛大さ、慎みの気持ちを持って、敵に対処してもらう必要があるのだよ」ポーデイズ行政官は言った。……

「私はイギリス人を指揮するイギリスの指揮官ですから、政府の正当な期待を裏切りたくないんです。ですが、黒い旗の下にいるあの悪党どもは、われわれの国民の財産を略奪しただけでなく、屋敷を燃やし、わが同胞と幼い子どもたちを残忍に殺害し、妻と娘を殺すよりも質の悪いことをやったということをご存知だと思いますが……」カートン司令官は答えた。……

「私は悪魔から直接任命されたのではなく、神によって任命されたと信じておりますので、必要以上の苦痛を避けつつ、せめてもの慈悲としてあらゆる処置を素早く実行に移し、あいつらを地上から抹殺することで、その権限を使いたいと考えております。」(179)

引用の最後でカートンが表明する決意が、ディケンズがバーデット＝クーツへの手紙の言葉と重なることから、この言葉がディケンズ自身の見解を色濃く反映したものであるという解釈は十分な妥当性を持つはずである。対照的に、ポーデイズは第二章と第三章では狂気の状態にあり、海賊に降服を迫るなど周囲の邪魔にしかならない人物として表象される。ディケンズにとって、反乱が発生した後に必要なのは慈悲などではなく、力の行使を厭わないリーダーであっ

た。

力の行使を肯定的に解釈する以上、兵士が当時の人々の抱いていた理想を体現することになる。このことは、当時の報道で最も英雄視されたのがヘンリー・ハヴェロック (Sir Henry Havelock)、コリン・キャンベル (Sir Colin Campbell) をはじめとする軍人であったことにも象徴されているだろう²⁶⁾。『バーナビー・ラッジ』(Barnaby Rudge) でゴードン暴動を描き、『二都物語』(A Tale of Two Cities) でフランス革命を扱ってみせたように、ディケンズが暴動について描く際には取り締まりの感覚が働き、無秩序な暴動を否定し、現状の体制や秩序の維持を支持するきらいがあり、兵士の勇敢な行為を賞賛の念を込めて描くのだが、「あるイギリス人捕虜の冒険」においても、海兵隊員が献身的な英雄として描かれる。一例を挙げるならば、「[女性や子ども]を救おうとしないのなら、自分に火を着けた方がました」(186)と言い残し、自分たちの苦境を本土の人々に伝える狼煙を上げるために丘に登り、役目を果たした後に海賊に殺されるハリー・チャーカー (Harry Charker) がその典型であろう。

当時ディケンズが置かれたコンテクストを考えるならば、ディケンズ自身がそのような理想に強く惹かれていたことは否定できないだろう。セポイ反乱が発生した1857年、ディケンズはコリンズが書いた戯曲『凍える海』(The Frozen Deep) でリチャード・ワーダー (Richard Wardour) 役を演じていたのだが、この役は自身が愛した女性のために、彼女の恋人を自分の命と引き換えに助けるという役どころであった。二年後に書かれた『二都物語』でシドニー・カートン (Sydney Carton) が同様の役割を果たすことを考えるならば、ディケンズが自己犠牲を厭わない人物にかなりの思い入れを持っていたことは確かである。

ディケンズをはじめとする当時の人々が、セポイ反乱の背景にあると考えたもうひとつの要素が、カースト制、サティ、女の赤ん坊を殺すといったインドの習慣に象徴される、〈イギリスからは理解しがたいインド人〉という人種観であった。ただ、反乱前にはインド人を〈勇気とエネルギーに満ち溢れた人々〉として、好意的に評する報道が多かった。『ブラックウッズ・マガジン』誌に掲載された「ダルハウジー卿支配下のインド」(“India under Lord Dalhousie”)はその典型である。

きちんと指揮をとってやりさえすれば、彼らはよく戦うし、ヨーロッパ人よりも死を恐れずに、時にはより大胆なこともやってのける。……彼らはケルト人や黒人のように無感動ではなく、怠けぐせもない。彼らは自分の置かれた状況を向上させようとするし、多く得られるほど、多くを欲しがるようになる。才能面でも、ヨーロッパ人に引けを取らない。……彼らは性格と知性については、われわれと同じグループに属している²⁷⁾。

同じ記事の中には、インド人の性格を「概して、豊かでエネルギーに満ち溢れており、世界で

もっとも柔軟な性格」として肯定的に描いた箇所もあり、セポイに関して、同誌は全体的には「われわれのセポイは、最良のヨーロッパ軍に次ぐものである」と楽観的であった²⁸⁾。だが、ここに見られるインド人像は全体としては好意的に描かれているものの、あくまでも「きちんと指揮をとってやりさえすれば」という留保がつくものであり、インド人が気質的に問題を抱えていることが示唆され、〈インド人は文明の初期段階にあり、イギリス人なしで進化することはない〉という偏見が反映されているのは確かである²⁹⁾。イギリスはインドに文明をもたらしただけでなく適切に統治しており、彼らもそれを喜んでいるというのが当時の一般的解釈であった。

当時の人々がこのような偏見を抱いていた以上、セポイ反乱はまさに青天の霹靂であったはずである。『ブラックウッズ・マガジン』誌に掲載されていた〈セポイが忠誠を装っていたのは、来るべき復讐をより恐ろしいものに見せるためであった〉という、動揺のあまり論理が崩壊した観のある記事は、反乱が起こった際の衝撃を物語ったものと解釈できる³⁰⁾。『ハウスホールド・ワーズ』誌1858年9月25日号の巻頭には「ヒンズーの法律」(“Hindoo Law”)という記事が掲載され、反乱前の支配者に忠実な状況から、何の前触れもないままに残酷さを前面に出してきたことに対する驚きの念が表明されている。

反乱前には、インドは征服者に対して忠実で、権威に対して服従し、内面の平和を表象するものであり、雲が影を投げかけることなどなかった。

突然、何の前触れもなく、その絵は血塗られたものとなり、「穏やかなインド人」は、……以前見知っていた性格と矛盾する、裏切り行為と残忍な行為を始めたのである³¹⁾。

当時支配的であったインド人観からすれば、セポイが何者かに騙されて反乱に及んだものという解釈が流布することとなったのは自明のことであろう。その黒幕と見なされたのがカウンプル虐殺を主導し、詩や戯曲を中心に「慈悲をかけるに値しない悪魔の化身」、「カウンプルの悪魔」として表象されたナーナー・サーヒブであり³²⁾、彼は〈信用に値しないインド人〉を象徴する存在として規定されることとなる。

われわれは次の日に、ナーナーは捕らわれの身となっていた女性と子どもを皆殺しにし、彼らを裸にして井戸に投げ込んだことを知った。これを実行したのは、われわれが優勢になったのを知ったためであった。……ナーナーはしばらくはわれわれから逃れられるかもしれないが、彼はいつの日か必ず絞首刑になるであろう……³³⁾。

ナーナーはある女性とその息子を殺せと命じた。彼女がナーナーに命乞いをしたにもか

かわらず、この恥ずべき男は彼女の訴えにはまったく耳を貸さずに、平原に連れ出した。……ついには、手を縛られた状態でそこにずっと立たされた挙句、ピストルで彼らは射殺されたのだ³⁴⁾。

舞台上で上演されたナーナーを悪役とした芝居の中でも最も大きな成功を収めたのが、ブーシコーの『ジェシー・ブラウン、またはラクナウの解放』であった。当時の新聞報道や不確実な憶測に基づいて構築されたこともあり、歴史上の事実が著しく歪曲された作品ではあるものの、逆に言えば、当時流布していた紋切り型の人種偏見を知ることでできる資料として捉えることもできるはずである。たとえば、カウンプール虐殺の首謀者であったはずのナーナーはラクナウに現われ、イギリスの統治に対する不満ではなく、キャンベル夫人をハーレムに招くために反乱を起こしたものとされる。

ナーナー：よく聞け！ 私はそなたをベナレスで見た——そなたの魂が私の目を通して心に入り込み、私の魂を外に押し出してしまったのだ。私はそなたを追いかけた——太陽が沈んでしまうように、そなたが私の追いかけることのできない場所に去ってしまうまで。ビトホーに行ったが、妻たちは私の中にあるそなたの魂を傷つけるのだ。私はやつらを金持ち連中にやり、追い払った——私のハーレムは寒々としておる！ 私はそこで孤独なのだ。ハーレムがここにある魂を心待ちにしておるのだよ。

キャンベル夫人：あなたは私の子どもたちを殺し、母親の名誉を汚そうというのね。

ナーナー：そなたの子どもは私のもの、つまりマラータの王子となる。一緒に来れば、血が流されることはないぞ。部下たちは引き上げさせよう。ラクナウは救われ、平和が回復されるのだ (113)。

当時の人々はこのような偏見に彩られたナーナーに対する怒りを、彼を演じた役者——誰も引き受けようとしなかったため、ブーシコー自身が担当せざるを得なくなった (図7)——に対して、腐った果物や壊れた傘を投げつけることで発散しようとしたのである³⁵⁾。

「あるイギリス人捕虜の冒険」では、黒人とインディアンの混血児クリスチャン・ジョージ・キングの姿を通じて、表面上は過度の誠実を装いながら、イギリス側の信頼を裏切る現地人が表象されることになるが、「狼のような速足」(170)、「犬のように唸る」(171)、「蛇のように、脚にくっついて離れない」(191) などという獣の比喩を用いてなされた表象を通じて強調されるのは、キングと獣の結びつきであった。現地人と動物を結びつけた表象は、以前『イグザミネーター』誌に投稿し、アフリカ黒人を揶揄した「高貴なる野蛮人」(“The Noble Savage”) における、「豚のような」野蛮人にも見られたものである。

私は高貴なる野蛮人などというものを、まったく信じることができない。連中は桁外れの厄介ものであり、大層な迷信の持ち主であるようだ。ラムを火酒と呼び、私の顔が青ざめているなどと言う彼らを、私に承諾させることなどまったく不可能である。連中が私のことをどう呼ぼうが問題ではない。私は連中を野蛮人と呼び、文明化されることで地上からいなくなる野蛮人と呼ぶだけの話である。(文明の最も低俗な形だと思えてならない) ただの紳士ですら、唸り声をあげ、口笛を吹き、舌打ちをし、地団駄を踏み、浮かれ騒ぎ、ものを引き裂く野蛮人どもよりはましである。……奴は——残忍で、不誠実で、ずる賢く、凶悪な——野蛮人である。……世界の進歩の過程で現われた……野生動物であり、……うぬぼれて、退屈で、血に飢えて、単調ないかさま師である……連中がいなくなるということは、素晴らしい安心感を与え、人類を高めうるあらゆる影響の種をまくためには欠かせない準備作業である³⁶⁾。

ここで野蛮人が唸り声をあげる獣として描かれていることからして、野蛮人とキングの姿は獣をめぐる表象を通じて重なりあうはずである。「ああ、彼はなんと残酷なんだろう！ ああ、なんと見事に彼は敵の肉を切り裂き、骨を砕いてしまうんだろう！ ああ、彼はなんと虎や豹や狼や熊に似ているんだろう！」(471) という記述にも見られるように、彼は獣であり、「彼がこの世から消え去ることで、世界はより良いものになるはず」の存在であった(473)。

同時に、愛想が良く、環境に見事に順応した召使であるクリスチャン・ジョージ・キングの姿を通じて、表面上は過度の誠実を装いながら、イギリス側の信頼を裏切る現地人の姿が描かれることになる。実際、第一章前半では「混血の水先案内人 [クリスチャン・ジョージ・キング] は、特に女性や子どもに純粋な気持ちで接していたのだが、彼はなんと彼らを愛し、献身し、命がけて仕えているのだろう……」(175-6) という記述がなされ、デイヴィス以外の人々は彼を信頼し、マリオンはデイヴィスに「私たちにとても愛着を持ってきているわ。私たちのためなら、命だって惜しくはないみたい」(169) と告げるほどである。

ディケンズが手紙の中でインド人について「見ろ、あの卑劣な連中を——ご機嫌をとってやっているこちらのことを見下し、三十分ほど前に予告しただけでこちらを八つ裂きにしてしまうような、下品で、不実で、危険で、残忍な悪党どもを」(*Letters*; VIII, 473) と書いていることを念頭に置くならば、彼の裏切り行為がナーナーを彷彿とさせるものであるという解釈は妥当なものであるはずである。ディケンズはデイヴィスの口を借り、「それが正しいことだという以外の理由などないのだが、クリスチャン・ジョージ・キング——奴はクリスチャンでも、ましてジョージ王でもない——のあばらを蹴ってやればよかった」(166)、「私は現地人が好きではない——牡蠣のようにずっと黙っている奴以外は」(171)、「すばしこい野蛮人」(176)、

「人食い」(180)などと表象し、信頼できない現地人としてキングを描き出す。

ディケンズは、反乱に至った要因のひとつに、セポイに対する過度の信頼があると考えていた。当時の人々の間でも、特に反乱鎮圧後にはこの問題が取り上げられるようになったのだが、規模の小さな島国であるイギリスが、その何倍もの広大な帝国を維持していくためには、現地の人々の協力が不可欠であったことを念頭に置かなければ、自明のことであろう。ディケンズが「あるイギリス人捕虜の冒険」を、インドではなく中央アメリカの島に設定することを読者が了解しえたということは、ディケンズと読者との間に、セポイ反乱の対応次第では中央アメリカでも反乱が起こりうるという共通の了解が成立するだけの素地があったということである³⁷⁾。キングがネイティヴ・アメリカンと黒人の混血児であるという、通常なされないような設定がされているということは、ネイティヴ・アメリカンと黒人という「他者」に対する不審感が現われたものでもあるはずである。

ディケンズは『ドンビー父子商会』(*Dombey and Son*)において、大英帝国内の「他者」に対する侮蔑の念を「現地人」("The Native")という人物を通じて描き出したことがあり、1852年の『ハウスホールド・ワーズ』誌上でインド人を扱った際には、「時間や距離がどんなものであるかが分からない現地の人々」といった侮蔑表現が強調されていたことから窺えるように³⁸⁾、ディケンズが国内の下層階級に対して感じた同情の念は、海外の人種を軸とした枠には転化せず、帝国の維持と現地の人々の抹殺すら容認する形をとりえるということである。セポイ反乱がもたらした教訓〈現地の人々を信用するな!〉は、キングの姿を通じて露骨に反映されることになる。

ただ注意しなければならないのは、「あるイギリス人捕虜の冒険」にはセポイ反乱の影が色濃くありながら、作品で女性と子どもを襲撃するのはヨーロッパの下層階級の人々から構成された海賊であるという点である。

恐ろしい小柄なポルトガルの猿と、顔に深傷を負った——そのときに、彼の頭を一緒に切り落としてくれればよかったのに——片目のイギリス人の囚人に率いられた野蛮な海賊どもは、あらゆる国の最下層の人間であった。これまでで最も残酷で残虐な行為をするために、最悪の環境の中から最悪の男たちが選ばれたのだろうか。(199)

インド人に対する偏見と誇張に満ちた報道からすれば、ディケンズが、裏切る召使だけでなく、作品の最大の悪役を「他者」たる現地人に設定する、換言するならば、報道メディア同様、人種の枠組から悪役を構想することにはまったく違和感がないはずである。にもかかわらず、ディケンズが用いたのは、階級の枠組であった³⁹⁾。悪役の設定に階級を軸とした枠組があるとすると、興味深いのがデイヴィスの存在であろう。海賊の人々と重なる境遇——彼は捨て子であ

り、読み書きができない——を持ちながら、女性と子どもを守るだけでなく、愛するマリオンの気持ちを尊重し、彼女と結婚するのではなく、傍で見守ることを選択する英雄として描かれているのである。

デイヴィスと海賊を隔てるものがあるとすれば、彼が兵士であるという点であろう。当初デイヴィスは他の兵士の態度に反感を抱いているものの、海賊急襲の知らせを聞いて一変した彼らに感銘を受け、彼らに反感を持った自分を心から恥ずかしく思うという場面があるのだが、この場面はそれまで孤児という形で周縁に位置していたデイヴィスが彼らを受け入れ、軍という擬似家族に新たに組み込まれたことを意味している。ディケンズが兵士を好意的に描くことについては先にも触れたのだが、この角度からも追認することができるだろう。

「あるイギリス人捕虜の冒険」における階級を軸とした反乱という表象は、『バーナビー・ラッジ』、『二都物語』で民衆暴動を描いた際の特徴でもあった、階級を軸とした反乱という枠組を想起させ、ディケンズにおいて階級と民衆暴動が強く結びついていることを雄弁に物語る。セポイ反乱を報じた当時の報道と「あるイギリス人捕虜の冒険」を比較して見えてくるものは、ディケンズにおける階級をめぐる危機意識に他ならない。

結 論

イギリス帝国主義の歴史上、セポイ反乱ほど人々を興奮させたものはないと言ってもよいほど人々は興奮に駆り立てられ、ヒュングジ・パーク (Hyungji Park) の言葉を借りるならば、「バランスの取れた報道と言うよりも、ゴシック・ホラー的要素の強い報道」が『タイムズ』紙をはじめとする日刊紙上でなされ、雑誌もイギリス側の迅速かつ残忍な報復を正当化する道具として機能することとなった⁴⁰⁾。結果として、無数のエッセイ、教会での説教、小説、テニソンの作品に代表される詩、『ジェシー・ブラウン、またはラクナウの解放』に代表される戯曲といった様々な媒体を通じて偏見や誇張が拡散することとなり、集団ヒステリーに近い状況を招いていたのである⁴¹⁾。

「あるイギリス人捕虜の冒険」を歴史上のコンテクストに位置づけることによって見えてくるのは、報道で強調されることとなった、〈兵士と女性の姿に象徴される勇敢さ〉と〈ナーナー・サーヒブに象徴される、イギリス側には理解できない部分を持ち、残酷なインド人〉という二項対立を、〈カートン司令官やデイヴィスら軍人とマリオンをはじめとする女性の英雄的行為〉と〈信頼の置けない現地人、クリスチャン・ジョージ・キング〉という形で作品に対応させる、報道に強く感化されたディケンズの姿である。同時に、統治側の問題点を指摘した報道をも踏襲し、〈軍人と女性における英雄的行為〉と〈現地の役人の無能〉、〈現地人に対する復讐〉と〈反乱した現地の人々に対する慈悲〉という更にふたつの二項対立を軸として描き、

それぞれ前者が前景化するように作品は構築されている。

ただ、「あるイギリス人捕虜の冒険」をめぐるのは、報道からずれる部分を見出すことも可能であるということだ。この作品には、『パンチ』誌が1857年10月3日号の“Verbum Sapienti”、10月10日号の「イギリスに対する教皇権至上主義者」(“The Ultramontane against England”)、10月17日号の「ネーナー・サーヒブ体制下の兄弟たち」(“Brothers of the Order of Nena Sahib”)といった記事で展開したような宗教的要素も希薄なのだが⁴²⁾、報道と大きくずれてくるのは、階級をめぐる不安が作品に反映される点においてである。

ディケンズがこの作品を書いた後にも、セポイ反乱をめぐる作品は無数に生み出された。そのひとつの例が、1881年に書かれ、大きな人気を誇ったG・A・ヘンティ⁴³⁾の少年向け歴史冒険小説『危難のとき』であった。架空のウォレナー (Warrener) とハーグリーブズ (Hargreaves) という家族を軸としながら、ナーナー、ハヴェロック、コリン・キャンベルをはじめとする実在の人物を絡めていくという手法が採られており、史実の扱いはかなり改善されてはいるものの⁴⁴⁾、劣勢とみるや即座に逃亡し、女性や子どもですら殺害する「臆病な」インド人と、数的不利にもかかわらず、復讐心に燃えて闘う一方で、女性や子どもは殺さない「勇敢な」イギリス人という二項対立がここでも再生されることとなる⁴⁵⁾。インド王妃 (the Ranee) がいみじくも「イギリス人はなんと勇敢なのでしょう。……あなた方がインドを征服したのももっともね」⁴⁶⁾と述べるように、イギリスによるインド支配は、適者生存の法則から必然的なものとして表象されるのである。

ヘンティに見られるように、ディケンズ以降の作品ではインド人という「人種」を軸とした悪役が想定されたことを念頭に置くならば、ディケンズの異様さが前景化することになるだろう。支配階層の過信が下層階級の反乱を引き起こすという作品の構図は、『バーナビー・ラッジ』、『二都物語』の民衆暴動とも重なりあうものであり、ディケンズが民衆暴動の際に人種ではなく階級を軸としたということは、彼の想像力が植民地ではなく、イギリスを軸として機能することを指し示しているはずである。

注

- 1) Charles Dickens, *The Letters of Charles Dickens*, vol. VIII, Graham Story, and Kathleen Tillotson ed. (Oxford: Oxford UP, 1995), p. 459. 以下、この書簡集からの引用は巻数と頁をすべて本文中に表記する。なお、同年10月23日付のエミール・デ・ラ・ルー (Emile de la Rue) に宛てた手紙にも、同趣旨の内容が見られる (*Letters*; VIII; 473)。
- 2) Michael Paris, *Warrior Nation* (London: Reaktion Books, 2000), pp. 37-8.
- 3) Laura Peters, “Perilous Adventures: Dickens and Popular Orphan Adventure Narratives,” in *Negotiating India in the Nineteenth-century Media*, ed., David Finkelstein & Douglas M. Peers (New York: St.

Martin's Press, 2000), p. 172.

- 4) qtd. in William Oddie, "Dickens and the Indian Mutiny," in *The Dickensian* vol. LIVIII (London: Dickens Fellowship, 1972), p. 4.
- 5) G. Trevor, "The Bengal Mutiny," in *Blackwood's Edinburgh Magazine* vol. LXXXI (1857), p. 383.
- 6) *The Times*, 17 Sep 1857.
- 7) Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness* (Ithaca: Cornell UP, 1988), p. 203.
- 8) *Household Words*に掲載されたセポイ反乱がらみの記事としては, "A Mutiny in India" (15 Aug 1857), "Sepoy Symbols of Mutiny" (5 Sep. 1857), "Indian Irregulars" (12 Sep 1857), "A Very Black Act" (26 Sep 1857), "Indian Recruits and Indian English" (3 Oct 1857), "A Sermon for Sepoy" (27 Feb 1858), "Blown Away!" (27 Mar 1858), "At the Siege of Delhi" (3 Jul 1858) がある。
- 9) *The Times*, 7 Nov 1857.
- 10) *The Times*, 2 Oct 1857.
- 11) 後に、この報道は誤報であることが判明した。クリストファー・ヒバート (Christopher Hibbert) によれば、マーガレットはイスラム教に改宗し、アリと結婚したという。後に彼女はカトリックの司祭に対してアリへの感謝を述べるとともに、イギリス政府と接触することを拒否した (194-5)。一方、ソール・デイヴィド (Saul David) によれば、カウンポール在住のエマ・クラーク (Emma Clarke) に対し、あまりに恥ずかしく、家族と連絡を取るつもりはないし、動機はともかく、アリは自分を救ってくれたのだから迷惑をかけたくないと述べたという (221-2)。一般的に右翼的な傾向の強いデイヴィドではあるが、ここでヒバートの先行研究に言及せずに、マーガレットとアリとの結婚を黙殺したことは理解に苦しむと言わざるをえない。
- 12) Charles Dickens, "The Perils of Certain English Prisoners, and their Treasure in Women, Children, Silver, and Jewels," in *Christmas Stories* (London: Oxford UP, 1956), p. 186. 以下、このテキストからの引用頁はすべて本文中に表記する。ディケンズ作品の引用は、特に言及がない限り、New Oxford Illustrated Dickens edition (London: Oxford UP, 1947-59) による。
- 13) アルフレッド・テニソン (Alfred Tennyson) は、「ラクナウ防衛」 ("The Defence of Lucknow") で "Children and wives—if the tigers leap into the fold unawares— / Every man die at his post—and the foe may outlive us at last— / Better to fall by the hands that they love, than to fall into theirs!" (III; 37) としている。同様の表象は、G・A・ヘンティ (G. A. Henty) の『危難のとき』 (*In Times of Peril*) でも用いられている (図8)。
- 14) Dion Boucicault, *Jessie Brown; or, The Relief of Lucknow* in *Plays by Dion Boucicault*, Peter Thomson ed. (Cambridge: Cambridge UP, 1984), p. 130. 以下、本書からの引用は頁をすべて本文中に表記する。
- 15) この表現は、復讐を叫ぶ世論の中で、当時盛んに喧伝された。『ジェシー・ブラウン、またはラクナウの解放』からの先の引用部にもこの表現が用いられていたのだが、この表現が広く浸透していたことを物語っている。
- 16) Oddie, op. cit., p. 4.
- 17) G. Trevor, op. cit., p. 387.
- 18) *The Times*, 6 Aug 1857.
- 19) *Punch* vol. XXXIII, p. 108. 以下、このテキストからの引用頁はすべて本文中に表記する。

- 20) 作品では、キングに対して「サー」という称号が用いられているが、現地人キングがこのような称号を持つということは考えられない。ディケンズのポセイに対する嫌がらせが、言語のレベルで表出したひとつの例である。
- 21) Charles Dickens, *The Speeches of Charles Dickens*, ed. K. J. Fielding (Oxford: Clarendon P, 1960), p. 284参照。このスピーチは1858年12月3日に行なわれたものであるが、インドの刑罰のひとつに大砲で人間を吹き飛ばすという手法があることは、同年の『ハウスホルド・ワーズ』誌3月27日号の「射殺せよ！」(“Blown Away!”)で既に言及されていた。ディケンズのスピーチは、その記事を念頭に置いてなされたものと思われる。
- 22) E. Townsend, “A Mutiny in India,” in *Household Words* vol. XVI (1857), p. 156.
- 23) *The Times*, 17 Oct. 1857.
- 24) *The Times*, 2 Oct 1857.
- 25) C. Hamley, “Our Indian Empire,” in *Blackwood’s Edinburgh Magazine* vol. LXXXII (1856), p. 661.
- 26) セポイ反乱鎮圧に活躍した軍人の中でも特に人気を集めたのが、カウンボールとラックナウの救援を指揮したハヴェロックであった。ジョン・M・マッケンジー (John M. MacKenzie) は、狂信的なキリスト教信者で、周囲から疎まれていたハヴェロックが、その信仰心と熱意ゆえに神話的地位に高められていったものと分析している (116-21)。マイケル・パリスは、「真のピューリタンの兵士」を体現していたハヴェロックが、ヴィクトリア朝期中流階級の人々の理想を体現していたと指摘している (38-41)。
- テニソンは「ハヴェロック」(“Havelock”)という詩で「勇敢なハヴェロックが死んだ／優しく、偉大で、善良な男が／そしてイギリスにいる誰もが／『自分にはハヴェロックの血が流れている』と言っている」と書いてその死を悼み (II; 599)、ヘンティは『危難のとき』において、ハヴェロックの死を「彼は勇敢で、善良な男であり、彼がそのために大いに尽力してきた人々の安全が確かなものになったまさにその時に亡くなったことは、彼の戦友や彼の下で闘った兵士だけでなく、イギリス全土の人々を意気消沈させるものであった」(292)と表象している。
- 27) R. H. Patterson, “India under Lord Dalhousie,” in *Blackwood’s Edinburgh Magazine* vol. LXXXII (1856), p. 237.
- 28) C. Hamley, op. cit., p. 643.
- 29) Lawrence James, *The Rise and Fall of the British Empire* (New York: St. Martin’s P, 1994), p. 192.
- 30) J. W. Kaye, “The Demise of the Indian Army,” in *Blackwood’s Edinburgh Magazine* vol. XC (1861), p.101.
- 31) Henry Richard Fox Bourne, “Hindoo Law,” in *Household Words* vol. XVII (1858), p. 444.
- 32) Brantlinger, op. cit., pp. 201-5を参照のこと。ただし、ナーナーがどの段階から、またはどの程度反乱に関わっていたのかについては状況証拠の域を出るものがなく、詳しくは分かっていない (長崎: 176-180頁)。ヒバートは、ナーナーが反乱したセポイからの依頼を受けて反乱に参加したとしているが (176-7)、デイヴィッドは、計画段階からナーナーが関わっていたとしている (50-1)。
- 33) *The Times*, 23 Sep 1857.
- 34) *The Times*, 2 Oct 1857.
- 35) Brantlinger, op. cit., p.206.

- 36) Charles Dickens, "The Noble Savage," in *The UnCommercial Traveller and Reprinted Pieces*, p. 467.
- 37) Brantlinger, op. cit., p. 202; Peters, op. cit., p. 117
- 38) Joachim Heyward Siddons, "Justice for "Natives,"" in *Household Words* vol. VII (1852), p. 399.
- 39) 奇妙なことに、ブラントリンガーがこの作品を論じた際には、この視点が欠落している。彼はこの作品の悪役をクリスチャン・ジョージ・キングと解釈しており、海賊についての言及はまったく見られない。しかも、彼はボーデイジに象徴される統治側の問題にも言及しておらず、人種の枠で作品を切ろうとしたという観が否めない (206-8)。
- 40) Hyungji Park, "'The Story of Our Lives': *The Moonstone* and the Indian Mutiny in *All the Year Round*," in Finkelstein & Peers, op. cit., p. 85
- 41) ブラントリンガーは、当時人気を博し、影響力を持った煽情的な目撃記事として、Mrs. J. A. Harris の *Lady's Diary of the Siege of Lucknow* (1858)、Robert Gibney の *My Escape from the Mutineers in Oudh* (1858)、Mowbray Thompson の *Story of Cawnpore* (1859) を挙げ、歴史書としては Charles Ball の *History of the Indian Mutiny* (1858)、Sir John William Kaye の *Sepoy War in India* (1864-80)、T. Rice Holmes の *History of the Indian Mutiny* (1898) を挙げ、詩ではテニスの作品の他に、Sir George Trevelyan による *Cawnpore* (1865) を代表作として提示している (202)。ヒルダ・グレッグ (Hilda Gregg) によれば、作家や読者がこれほど興奮したのは、1745年のジャコバイト反乱以来だという (218)。
- 42) マイケル・パリスが指摘するように、1830年代以降、インドは宣教師によるキリスト教布教が盛んに行なわれていたこともあり、セポイ反乱そのものをキリスト教に対する反逆と捉える人々も多かった (37)。たとえば、『ジェシー・ブラウン、またはラクナウの解放』では、キリスト教徒としてのイギリス人の姿が前景化する。ブーシコーは作品中にデヴィッド・ブラント (David Blount) という牧師を登場させ、「ああ、慈悲深き父なる神よ、こんなに素晴らしい人々が死ななければならないとは！ 我らに憐れみを、この幼い、弱きものたちに憐れみをお与えください！」(117) などという台詞を語らせることによって、作品に宗教的要素を持ち込んでいる。実際はヒンズー教徒であったはずのナーナーがイスラム教徒として表象されることに象徴されるように、ここにブーシコーの誤認があるのは確かだとしても、キリスト教徒たるイギリス人のアイデンティティを強調し、異教徒たるインド人との二項対立を明確に浮上させるという意図があったことは容易に了解しうるはずである。
- 43) ロバート・A・ハッテンバック (Robert A. Huttenback) が指摘するように、ヘンティは世紀転換期の実質すべての少年が読んだと言っても過言ではないほどの人気作家であった (47)。彼の保守的な帝国観が色濃く反映された作品を分析することで、ディケンズやブーシコーが表象したような見解がどのような変遷を遂げたのかをある程度辿ることができるはずである。
- 44) Mark Naidis, "G. A. Henty's Idea of India," in *Victorian Studies* vol. 8 (1964), p. 52.
- 45) 注意しなければならないのは、ブーシコーとは異なり、ヘンティはイギリスに好意的なインド人を登場させていることである。ウォレナー家のインド人召使は、主人をかばってセポイに殺され、ケイト・ウォレナー (Kate Warrenner) とローズ・ハートホルド (Rose Hertfold) の逃走を手助けするインド人も登場する。彼らの姿を通じて、イギリスがインドの理想的統治者であることが前景化するよう作品は構築されているのである。
- 46) G. A. Henty, *In Times of Peril* (Cave Junction: Robinson Books, 2002), p. 141.

引用文献

- Boucicault, Dion. *Jessie Brown; or, The Relief of Lucknow in Plays by Dion Boucicault*. ed. Peter Thomson. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Bourne, Henry Richard Fox. "Hindoo Law," in *Household Words* vol. XVII (1858).
- Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness*. Ithaca: Cornell UP, 1988.
- David, Saul. *The Indian Mutiny*. London: Penguin Books, 2003.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*, vol. VIII. ed. Graham Story and Kathleen Tillotson. Oxford: Oxford UP, 1995.
- , "The Noble Savage," in *The UnCommercial Traveller and Reprinted Pieces*. London: Oxford UP, 1958.
- , "The Perils of Certain English Prisoners, and their Treasure in Women, Children, Silver, and Jewels," in *Christmas Stories*. London: Oxford UP, 1956.
- , *The Speeches of Charles Dickens*. ed. K. J. Fielding. Oxford: Clarendon P, 1960.
- Gregg, Hilda. "The Indian Mutiny in Fiction," in *Blackwood's Edinburgh Magazine* vol. CLXI (1897).
- Hamley, C. "Our Indian Empire," in *Blackwood's Edinburgh Magazine* vol. LXXXII (1856).
- Henty, G. A. *In Times of Peril*. Cave Junction: Robinson Books, 2002.
- Hibbert, Christopher. *The Great Mutiny: India 1857*. London: Penguin Books, 1978.
- Huttenback, Robert A. "G. A. Henty & the Vision of Empire," in *Encounter* vol. 35 (1970).
- James, Lawrence. *The Rise and Fall of the British Empire*. New York: St. Martin's Press, 1994.
- Kaye, J. W. "The Demise of the Indian Army," in *Blackwood's Edinburgh Magazine* vol. XC (1861).
- MacKenzie, John M. "Heroic Myth of Empire," in *Popular Imperialism and the Military, 1850–1950*. ed. John M. MacKenzie. Manchester and New York: Manchester UP, 1992.
- 長崎暢子『インド大反乱一八五七年』、東京、中央公論社、1981年。
- Naidis, Mark. "G. A. Henty's Idea of India," in *Victorian Studies* vol. 8 (1964).
- Oddie, William. "Dickens and the Indian Mutiny," in *The Dickensian* vol. LIVIII (1972).
- Paris, Michael. *Warrior Nation*. London: Reaktion Books, 2000.
- Park, Hyungji. "'The Story of Our Lives': *The Moonstone* and the Indian Mutiny in *All the Year Round*," in *Negotiating India in the Nineteenth-century Media*. ed. David Finkelstein & Douglas M. Peers. New York: St. Martin's Press, 2000.
- Patterson, R. H. "India under Lord Dalhousie," in *Blackwood's Edinburgh Magazine* vol. LXXXII (1856).
- Peters, Laura. "Perilous Adventures: Dickens and Popular Orphan Adventure Narratives," in Finkelstein & Peers, op. cit.
- Punch vol. XXXIII (1857).
- Siddons, Joachim Heyward. "Justice for "Natives,"" in *Household Words* vol. VII (1852).
- Tennyson, Alfred. *The Poems of Tennyson*, vol. II, III. ed. by Christopher Ricks. Harlow: Longman, 1987.
- The Times*, 6 Aug 1857.
- The Times*, 17 Sep 1857.

The Times, 23 Sep 1857.

The Times, 2 Oct 1857.

The Times, 17 Oct 1857.

The Times, 7 Nov 1857.

Townsend, E. "A Mutiny in India," in *Household Words* vol. XVI (1857).

Trevor, G. "The Bengal Mutiny," in *Blackwood's Edinburgh Magazine* vol. LXXXI (1857).

(本学講師／一般教育)



図1 カウンポールのイギリス人殺害



図2 カウンポールの虐殺



図3 カウンボールでセボイから身を守るマーガレット・ウィーラー



図4 ジョン・テニエル画「正義」

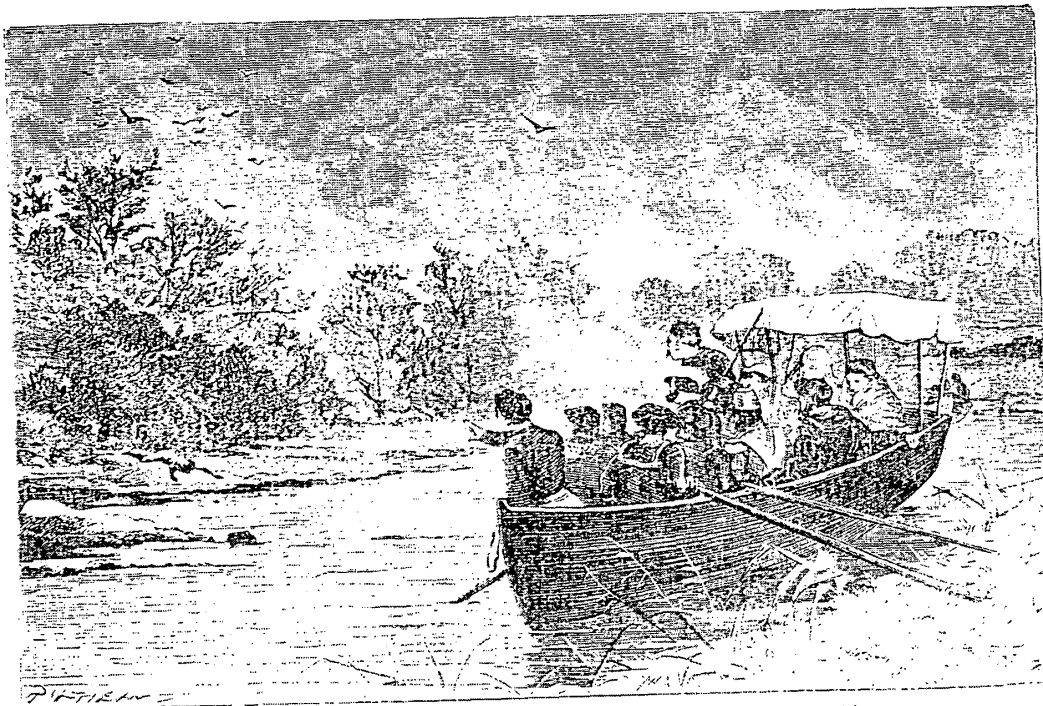


図5 F・A・フレイザー画「クリスチャン・ジョージ・キングの死」



図6 「慈悲深きキャンニング」



図7 ナーナーに扮したブーシコー



図8 「敵からの絶え間ない砲弾」